

# 契丹に於ける大藏經彫造の事實を論ず

妻 木 直 良

一、高麗版大藏經と契丹本大藏經との關係——二、契丹本大藏經の高麗輸入——三、契丹人の著作せる佛教典籍——四、契丹本大藏經の彫造年代——五、契丹本大藏經の内容——六、契丹に於ける佛典研究

## 一 高麗版大藏經と契丹本大藏經との關係

予の是稿を起したるは、唐末より北宋代に亘りて其威力を振ひたる北方の强者契丹に於ける大藏經六千餘卷彫造の事實を論證せんとするに在れど、之に關連して一言せざるべからざるは、高麗に於ける大藏彫造の年代なり。現時我國に傳はれる高麗版大藏が、他の宋元明清の各大藏版に比較して、其の學術的價値に富めるとは、古來より我が佛教學者に依て唱導せらるゝ所なれど、今一步進んで考察すれば、其高麗版の底本となれるものは正しく契丹本に在り、されば契丹本大藏の形式内容を論ずることは、嘗に契丹三百年(西遼を合せて)間の一大事業を世に紹介するのみならず、佛教研究者に取て等閑にすべからざる問題といふべし。依て以下予輩が此問題に對し、其史料を蒐收して聊か其事實を明にし得たることを記

せんと欲す。

我が國に最も多く流傳せる高麗版藏經につき、其木版は既に亡滅せりとさへ傳へられ、明治十八年に完成せる縮刷藏經、弘教書院本の緣起にも其のことを記載せしが、後に到りて其誤謬を窺見し、其木版の現存を知るに到りしも、明らかに何れの處に存在し、如何なる状態に保存せられあるかを詳かにせざりしが、朝鮮の地が我に併合せられし以來、其事情を知るに多くの便宜を得て、其の名蹟故刹を調査するに當り、其任にあたりたる關野博士が、親しく慶尙北道陝川郡伽耶山の海印寺に到りて、其の大藏木版が嚴然として保存せらるゝことを知り、委細に其状態を調査して之を報告せられたり。茲に於てか現存約十四種の漢澤大藏經版本ある中、最も學術上に價値多しとせられたる高麗版の木版が、完全に保存せらるゝこと一般に知れ亘り、無二の國寶として尊重せられ、統監府時代に於て特に人を派して之を調査し、其の調査報告書も印刷頒布せられたり。而して是の木版の彫造年代に關し、古來より種々の説を傳へられ、或は千年以前の新羅時代なりと云ひ、或は高麗朝の初期と云ひ、我が國の佛教徒にては、専ら北宋至道年間(西九九五—七年)彫造の説傳へられしが、是の高麗藏の中に契丹本の大藏經に依りて校合訂正せられしことを記載するあり、守其法師の『校正錄』に明かに丹本大藏を掲げて校合本に加へ、而も多くは丹本に依て誤脱を訂正せるを見れば、大部分は丹本に依て彫造せることを察せらる。而して其の丹本の高麗朝に渡來せる年代を見るに、『高麗史』の記事に依れば、文宗十七年(西紀一〇六三年)にして、宋朝にては嘉祐八年に當り、至

道年間を去ること約六十五年の後に在り。されば是等推定はすべて誤謬に屬すること明かにして、爾後はその問題に對し研究の歩を進むる人少からざりしが、『李相國全集』に出てたる大藏刻板君臣祈告文内藤博士發見、『新佛敎』第十一卷第五號の拙稿、高麗大藏經雕板年代に出づの一文が發表せらるゝに及び、高麗朝に於て二回の大藏雕刻ありしこと明瞭となり、今日存在せる高麗版大藏經なるものは、『高麗史』第廿四卷、高宗の即位第三十八年の條下に

壬午幸城西門外大藏經板堂、率百官行香、顯宗時板本、燬壬辰蒙兵王與群臣更願立都監、十六年而功畢。

と記されたるものに當り、正に今より六百六十年前の古板なること確定せらる。予が右の意見を草して、『新佛敎』紙上に掲げたるは、明治四十三年の五月號なりしが、其の同年七月に、在朝鮮京城の淺見法學士はまた同じく李奎報の祈告文と、『高麗大藏目錄』の跋尾に記されたる

戊申年高麗國大藏都監奉勅雕造

の文に依り、是の木版の彫造完成年代を高宗即位第卅五年の戊申歲なりと推断せり、是の如くにして現存麗版雕造の年代が高宗時代に完成再雕せること甚だ明かにして動かすべからざること、彼の地に於ける學者の間にも認められたるは洵に慶すべき次第といふべし。但し其の完成年代を以て戊申年なりとするは、『高麗史』に出てたる辛亥歲完成の記事よりも三年早し、たとひ目錄の彫造は戊申年なりとも、他の經典が是の戊申年後に雕造せられざるを保すべからず。殊に各地に分司都監ありて、其彫造を分擔せる以上、必ずしも目錄の雕造

紀年を以て其最終完成を見るべきにあらず、況んや李奎報の孫にして、其彫造の事實を實見せる益培が『李奎報文集』の序文に於て、辛亥歳を以て大藏完成の事實を證し、今者分司都監、雕海藏告畢之暇、奉勅鑲板、辛亥歳の記と記せり、而して『高麗史』に記されたる板堂落成の慶讚會が彫造後三年を過ぎて後に之を營むべき理由もなき故、たとひ其の彫造が辛亥歳の前年に終れりとするも、是の慶讚會舉行の辛亥歳西紀一二五一年を以て完成紀年と定めて然るべしと考へらる。こは甚だしき大問題に非るも、因みに一言を費すのみ。

さて現存海印寺の版本には、その後に追加彫刻せられしものもあり。或は前の高宗時代の彫刻にして一部分磨滅せる經典は、後代の補刻に成るものあるは、種々の點より推察せらるることなるが、其の大躰は高宗辛亥歳に成ることは既に明かなり。然れども國本、宋本、丹本等の諸大藏經を校合して、比較的善本を作りて學者を益したる校合の擔任者守其法師なるものは、顯宗時代の人なりや、將たまた高宗時代の人なりや、之を決定すべき史料なくして、『新雕大藏校正別錄』なるものは、何時代の撰なるや少しも之を知る能はざりしが、幸に高宗朝の文士たる崔滋の編したる『續破閑集』に依り、其中に

開泰寺僧統守其、學博識精、奉勅勘大藏經、正錯如素所親譯云々、内閣藏の補閑集に依る。

といへる一段の記事ありて、崔滋及び河千且等と同時の人にして、當時既に大藏の錯を正すこと親から之を譯するが如しと云へる名譽を荷へる高僧なること明瞭となり、隨つて丹本、國本、宋本等を校合して善本を作りたるは、舊彫刻の時代にあらずして、新彫刻の高宗時代な

ること確定せり。〔新佛教〕第十一卷第六號所掲拙稿參照〕

その後、文宗の第三子にして『諸宗教藏總錄』の著者たる義天法師の文集なる『大覺國師文集』が關野博士の發見に依りて世に傳はるや、その第十五卷に

顯宗則彫五千軸之秘藏、文考乃鏤千萬頌之契經（初め五行許のみ存し餘は落丁缺版となり居れり）

とある文句により、『海印寺調査報告書』には、顯宗と文宗とは何れも大藏經雕刻を完成せりと論じ、高麗朝に於ては是の後の高宗朝とを合せ、都合三回の大藏彫刻を遂行せりと記せり。然れども予は此説を信ずる能はず、顯宗と文宗とは父子にして顯宗薨去後は、長子德宗紹ぎ、其次に次子靖宗即位せしも、何れも夭折にして其間僅かに十五年に過ぎず、されば第三子たる文宗の即位せしは父王顯宗薨去後の第十六年なり。たとひ顯宗の在位年數廿二年を加ふるも、僅かに卅八年に過ぎず。卅八年の間に五千卷の大藏を二回迄も雕造する必用ありとは思はれず、殊に顯宗十二年に蔡忠順をして記さしめたる玄化寺の碑陰文（海東金石苑卷四所載）に依れば、大般若經等一部分の大乘經典を雕造せしめたることを記すれども、全部の大藏を雕造せしめたること見え、之を北宋元豐年代創刊の福州版大藏經の雕造に考ふるも、彼は元豐三年（西紀一〇八〇年）頃に始まりて、南宋の紹興十八年（西紀一一四八年）頃に終れり。即ち此間に費す所は六十八年を算せり。たとひ福州版は民間僧俗の共力に成り、高麗の方は王家の官版に成るとは云へ、丹兵侵入の餘を受けて疲勞したる國力にて容易く成遂し得

べくもあらず是を以て予は顯宗の祈願創成により文宗紹成せることを、義天法師が美文にものされたるもの、即ち文集第十五卷の文句なりと推斷す。然らざれば李奎報の文及び『高麗史』高宗辛亥歳の記事、何れも舊板を以て顯宗板と指定せること解釋すべくもあらず、是に依て予の推定せる所にては、高麗朝の大藏彫刻は前後二回にて、第一回は顯宗即位の初年に(西紀一〇一一年)發願して文宗の即位十二年頃(西紀一〇五八年)に至る約四十七年間に完成し、第二回は前述の如く高宗即位二十三年(西紀一二三六年)に發願し、卅八年辛亥歲(西紀一二五一年)に至る十六年間に『高麗史』に依るに完成せるものなりとす。『新佛敎』第十二卷第四號第五號拙稿参照)

## 二 契丹本大藏經の高麗輸入

さて高麗版大藏の彫造年代につきて既に其の大概を記し終りたり。次で起るべき問題は、守其法師が再彫の際に最も多く其長所を認めて之を取りたる契丹本(大藏經なるものは、いかなる形式の本なりや何時代に編製せられたりや、雕刻本なりや筆寫本なりや等の疑問是れなり。冒頭に一言せる如く此稿を起すに到りたる原由は其の諸疑問を解釋せんとするに在り。今まづ契丹本の高麗朝に入りし史上の事實を探るに、『高麗史』には文宗、肅宗、睿宗の三朝に互り三回あり、『遼史』には道宗咸雍八年(麗朝の文宗廿六年)に高麗に佛經一藏を賜ふとあり、『三國遺事』には麗朝睿宗十七年に釋慧照なるもの遼藏三部を市して歸るとあり、之を

表すれば左の如し。

麗朝	遼朝	西紀	記事
文宗十七年	道宗九年	一〇六三	契丹國送大藏來(麗史八)
同 廿六年	同 咸雍八年	一〇七二	賜高麗佛經一藏(遼史廿三)
肅宗四年	同 壽昌五年	一〇九九	遼使來兼賜藏經(麗史十二)
睿宗二年	天祚七年	一一〇七	遼使來仍賜藏經(麗史十二)
同 十七年	同 保大二年	一一二二	慧照市遼藏三部歸(遺事三)

『契丹國史』に依れば、契丹の太宗會同元年(西紀九三八)に契丹の號を改めて大遼とせしが其後四十五年にして、聖宗の統和元年(西紀九八三)に復た契丹の號を復し、道宗の咸雍二年(西紀一〇六六年)に復た大遼國と改稱せり。されば『麗史』に出てたる文宗十七年には契丹國と呼びしが、後に出てたるものは遼國と改稱せり。『遼史』は僅かに一回のみを記せども『麗史』より見れば數次その大藏を高麗に賜はりしが如し。但し『遼史』に出てたる咸雍八年の記事を『麗史』に照せば、其年代合はず、之を文宗朝のこととすれば九年後、肅宗朝のこととすれば二十七年早し。是は無論始めて契丹本大藏を高麗に送りし記事なるべくすべての點より之を考ふるに、史料としては『高麗史』の方信を置くに足るべし。されば予は契丹本の始めて高麗に入れる年代を文宗十七年とし、是時代には既に初度の麗藏彫刻その功を終へたりし故、第一回彫造は専ら宋本に依りて丹本を校合せざりしものと考ふ。そは守其法師の『校正別錄』

を讀めば稍その状態を推察するを得べし。そは兎に角是の初度の事實より推論すれば契丹本の成立は高麗朝の文宗十七年以前契丹の道宗清寧九年以前に求めざるべからず。

### 三 契丹人の著作せる佛教典籍

然らば道宗清寧九年以前に於て大藏經を編纂し雕刻せし事實ありやと云ふに、由來契丹の歴史は、その國の史料としても南宋代に葉隆禮の編せる『契丹國史』と元代編修の『遼史』及び近代の編述に係る『遼史拾遺』等とに依る外、金石の遺文を探索して漸く其事情を明かにするに過ぎず、宋代沈存中の謂へる如く、其國に於ける書禁甚だ嚴にして之を外に傳ふるものは死罪に當ると定めたるに由り、殆んど遼代の人が自ら其時代を記せる根本的史料は絶無の次第なれど、幸に佛教に關するものは、今日に傳來せるもの甚だ多し。是れ佛教崇敬に於て梁武唐文にも優ると稱せらるゝ道宗の治世に當り、高麗には王子を以て緇門に入り、命世の才を以て佛典蒐集に勉めたる義天法師の出づるあり。互に音問を通じ佛典の有無を交通したるが爲めその遺書を今日に傳ふるを得たるものにして、契丹史の缺を補ひ併せて佛教盛典の状態を徴すべき史料、左の如し。

大日經義釋演密鈔

十卷

僧覺苑撰

釋摩訶衍論贊玄疏

五卷

僧法悟撰

同 論通玄鈔

四卷

僧志福撰



顯密圓通成佛心要集

二卷

僧道殷集

華嚴經談玄決擇

六卷

僧鮮演撰

以上五種の佛典は何れも道宗と同時代の人にして、就中覺苑の如きは興宗道宗二代に歴事し、一切經の校訂及び彫造を擔當せることは、その文中に記述せられたり。此事實は後項に詳述すべし。法悟の撰に成れる『釋論』の『贊玄疏』は、印度、馬鳴菩薩の著述にして、佛教概論とも稱すべき『起信論』を龍樹大士が講解せりと稱せらるゝ『釋論』の講義なるが、其名は法悟の撰なるも、其内容を檢するに、全く道宗の指授に依りて之を解釋せるものなれば、寧ろ御製の字を冠するを至當とす。耶律孝傑の序文ありて、其肩書には

貞亮翼贊同德致理功臣開府儀同三司守太保兼中書令監修國史知樞密院事上柱國燕國公食邑七千五百戶實封漆佰伍拾戶臣耶律孝傑 奉 勅撰。

とあり。撰者の肩書は

中京報恩傳教寺崇祿大夫守司空詮圓通法大師賜紫臣沙門法悟奉勅撰。

とあり。其第一卷(丁三)に

我聖文神武全功大略聰仁睿孝天佑皇帝位纂四輪道逾三古蘊生知之妙慧賦天縱之全才、性海深游、梁武帝空修福善、仁澤普洽、唐文皇自滅英聲、三乘八藏以成該六籍百家而備究、潮音演旨、掩義解之高流、麗藻摘詞、得文章之大體、至於禪戒兩行性相二宗、恒切熏修、無輟披翫、三寶荷住持之力、萬邦飲清淨之風、功德無邊稱揚不盡、奧若清寧紀号之八載、四方無事、五稼

咸登要荒共樂於昇平、溥率皆修於善利、皇上萬樞多暇、五教皆弘、乃下溫綸、普搜鑿典、獲斯寶冊、編入華龕、自茲以來流通寔廣。(下略)

此文を讀むと、溢美の讚辭を呈して帝德を稱揚せりと雖も、其中自ら事實を語るものあり。殊に清寧八年に於て『釋摩訶衍論』なる寶冊を探り得て、之を大藏經中に編入せりといふ一條は、大藏彫造の事業が業に既に是の時代に成功し居れることを證するものと云ふべし。そは後項に於て詳説すべし。

次に同じく『釋論』の『通玄鈔』を撰したる志福は、『遼史』にも其名を記され咸雍五年の條下に

僧志福加守司徒

とあり。此書には天祐皇帝御製の序あり。撰者志福の肩書に、

大遼醫巫閭山崇椽大夫守司徒通圓慈行大師賜紫沙門志福撰。

といへり。天祐皇帝の序文に

今東山崇仙寺沙門志福業傳驚嶺、德茂鵬養、乃至繇是尋原討本、博採善義、勸成釋摩訶衍論鈔四卷、爰削章而陳達欲、鏤板以傳通。(下畧)

とあり。前の『贊玄疏』の耶律孝傑の序にも

詔從模鑲言使傳通目龜鏡以長存。(下略)

とあるに依り、當時いかに鏤板の盛行せしかを推察せしむ。『遼史』を按ずるに、道宗清寧二年には群臣より天祐皇帝の尊號を上りしことあり、更に咸雍元年に至り聖女神武全功大略廣

智聽仁睿孝の十四字を加へて尊號とせり、前に引ける贊玄疏の文には廣智の二字を脱せり。此の『通玄疏』には單に天祐皇帝とあれど、その尊號の如きは後世に傳流せる中、いかやうにも具略の異を存すべきものなるゆゑ、其の尊號の文字のみにては、兩書製作の前後を定め難し、其内容に於て前の『贊玄疏』が詳かに『釋論』の來歴を説き、且つ清寧八載の紀あるに徴すれば、正に『贊玄疏』前に成りて、『通玄疏』後に成れりと稱すべし。

次に『顯密心要集』は單に

五臺山金河寺沙門道殷集

と記せるのみにて、賜紫、加官の特遇を受けたる人とは見えざれど、卷末に

今居末法之中、得值天祐皇帝菩薩國王、率土之内、流通二教、一介微僧、幸得遭逢、感慶之心、終日有懷、似病人逢靈丹妙藥。

と記せるにて、其のいかに佛教保護の恩澤を感泣せるかを見るべく、

於顯教中、雖五教不同、而華嚴最尊最妙、是諸佛之髓、乃至於密部中、雖五部有異、而准提一咒最靈最勝、是諸佛之母。(下略)

と云へる文に依りて。華嚴宗と密教とが當時全盛の宗教なりしことを察すべし、『釋摩訶衍論』は弘法大師の請來に依り、我邦にては密教の聖典とすれど、元來は華嚴宗に依りて研究せられたるものにて、遼代の講解は何れも華嚴宗の聖典となせるを見ても、北方に於ける華嚴全盛の狀況を想見し得べし。『顯密心要集』には、宣政殿學士金紫榮祿大夫行給事知武定軍節

度使事上護軍潁川郡開國公食邑三千戶同修國史陳覺撰の序文あり。

『華嚴經談玄決擇』著者は第一卷を缺く故その緣起詳かならねど、上京開龍寺に居りし高僧にて、義天法師が道宗より得たる書なることは、第二卷の奥書に依て明かなり。

以上の如き遼代の佛典が現今我國に傳はるを得たるは、前に一言せる如く、高麗國の義天法師が續一切經彫刻に際し、弘く日本遼の諸國に人を派し、その傳來を請うて之を雕造せる賜にてその德澤は我徒の忘るゝ能はざる所なり。現在我が邦の尾州眞福寺に藏せらるゝ『釋論通玄鈔』に左の識語あり(友人中川忠順君の報道に依る)

壽昌五年己卯歲高麗國大興王寺奉宣雕造正二位權中納言兼太宰帥藤原朝臣季仲、依仁  
和寺 禪定二品親王仰遣使高麗國請來、卽長治二年乙酉五月仲旬、從太宰府差專使奉請  
之、

弘安五年壬午九月六日於高野山金剛三昧院 金剛佛子性海書

弘安五年壬午十月廿一日於高野山金剛三昧院 金剛三昧院老比丘良俊記之

此の識語に依り、此書はすべて美天法師の續一切經彫刻の際に編入せられしこと明白にて、東大寺所藏の華嚴經疏鈔の版本と相照し、何れもその昔最新の版本を請來せられたることを推想し得らるべく、亦た以て遼代の佛典が今日に傳はりし來歴を證明する唯一の史料とすべし。

## 四 契丹本大藏經の彫造年代

予輩が契丹國に於ける大藏經彫造の事實あることを主張するは、凡そ三種の史料に依れり。三種とは左の如し。

大日經義釋演密鈔 遼僧覺苑著前項出)

金石粹篇 清 王昶著

東文選 朝鮮徐居正等編

此の三種の中、最も有力なるは、『大日經演密鈔』なり。是は前項にも一言せる如く、遼の興宗道宗二代に歴史したる名僧にして、唐代一行禪師が密教の聖典たる『大日經』を解してその講義を作り、『大日經義釋』と名け十四卷ありしが、偶々興宗が大藏彫造の志願を起し、普く佛典を探索せる際、此の書を得て雕刻せるより、世に弘まることとなり、隨つて此の解釋を作る必要を生じ、遂に自ら筆を執つて此鈔を造り、『大日經義釋演密鈔』と云へり。一行の『義釋』の雕刻せられたるは清寧五年(西紀一〇五九年)にして覺苑の『演密鈔』の成りしは大康三年(西紀一〇七七年)なり。此書中に一行禪師の『義釋』を獲たる來歴を説き

勤成十四卷、目之曰義釋、未及宣演、玄宗幸蜀、禪師歿化、斯文尋墜、洎我興宗御宇、志弘藏教、欲及邇遐、勅盡雕鏤、須人詳勘、覺苑持承、繪旨、忝預校場、因採群詮、訪獲斯本、今上繼統、清寧五年、勅鏤板流行。(下略)

と云へり。興宗御宇、志弘藏教、欲及邇遐、勅盡雕鏤の四句は、當事者が自ら其の目撃せる事實を語るものと云ふべく、是に依て興宗時代にその業を創め、道宗の清寧五年以前既に古來傳來の大藏五千四十八卷は彫造の大事業を終へ、その後、得るに隨つて秘籍珍書を補刻して大藏中に編入せるものなるべし。前に引ける『釋論贊玄疏』の文中に清寧八載に『釋論』を獲て編入華龜と云へる文辭を參照せば、事實自ら明瞭なるを得べし。

更に是等の事實を證明すべき史料は、『金石粹篇』の遼朝中に收められたる左の二篇なり。

陽臺山清水院創造藏經記 遼僧志延、咸雍四年撰。

大遼雲居寺續秘藏石經塔記 遼僧志才、天慶八年撰。

此の陽臺山藏經記は最も親しく前説を助成すべきものにて左の如し。

陽臺山清水院創造藏經記

燕京天王寺文英大德賜紫沙門志延撰

鄉貢進士李克忠書

陽臺山者、荀襄之名峰、清水院者、幽都之勝槩、山之名傳諸前史、院之興止於近代、將構勝緣、旋逢信士、今優婆塞、南陽鄧公從貴、善根生得淨行、日嚴、咸雍四年三月、捨錢三十萬、葺諸僧舍、又五十萬、募同志、印大藏經、凡五百七十九帙、創內外藏、而龜措之、藏事既周、求爲之記、聊叙勝因、俾信來裔。

咸雍四年歲次戊申三月癸酉朔四日丙子記

## 燕京右街檢校太保大卿沙門覺苑

通天内外供御石匠曹辯鑄

右の藏經記の成れる咸雍四年は、道宗即位の十四年にして、『釋論』を大藏中に編刻したる清寧八年を去る六年後に在り。而して高麗國に丹本大藏の始めて渡來せる清寧九年を去る五年後に當れり。されば此時代の印造大藏は、初めての印造にあらざして、業既に幾度か印造を重ねたる後の事なるべし。但し文末に記されたる沙門覺苑は、即ち『大日經義釋演密鈔』の著者にして且つ藏經雕造の擔當者たり。結銜に記せる太保大卿の官につき、王昶は金史百官志に考無しと云へど、之を『大日經義釋演密鈔』の肩書に

燕京圓福寺崇錄太夫檢校太保行崇祿卿總秘大師

賜紫沙門覺苑

とあるに照合すれば、太保行崇祿卿と云ふべきを省略して太保大卿と稱せしならんと察せらる。覺苑の名を特記せるはその大藏校訂の大事に當りたる名僧なればならん。憫忠寺石函題名中にも、前校勘法師證教大德賜紫沙門蘊寂の名あり。是は大安十年頃に建てたるものなれば此の印造の年代咸雍四年よりも廿六年後に當れり、大藏校勘の職に當れるを以て、特に前校勘證大德の名を賜へるものなるべし。さて此の清水院藏經碑文の中に於て五百七十九帙とあるは、契丹大藏經の内容を知るにつきて、最も貴重なる史料と云ふべく、之を太遼雲居寺石經塔記に照せば、彷彿として幾許の經卷が編入せられ、いかなる經典が雕造せ

られたるかを伺ひ知るを得べし。されど是は別にその項目を設けて詳説すべく、今は次に『東文選』の文に依りて、まず〳契丹藏經彫造の事實を確かめ置くべし。『東文選』は李氏朝鮮の初に編せられたるものなれど、中に收められたる丹本大藏慶讃疏は釋宓庵の撰する所にして、宓庵は高麗元宗及び忠烈王時代に互りて生存し宋末元初の人なり。その記す所を見るに文字の工を極めたる爲め、史實を徴するに難きの想あれど、之を熟讀すれば、彫造の丹本大藏を慶賛するに在ること甚だ明けし。

## 丹本大藏慶讃疏

## 釋宓庵

道絶名邊、法離見聞、然渡海渡河、要由船筏、凡得魚得兔、必借筌蹄、而况文文、據般若之光、字字、揭毗盧之印、豈離黃卷、別討玄機、竊以結盜潮音、號爲海藏、龍樹師傳於西竺、法蘭馱入於中華、雖九牛之一毛、尙千函而萬軸、故雖雕印、莫廣流通、間或得而經營、例皆失於精妙、念茲大寶、來自異邦、秩簡部輕、函未盈於二百、紙薄字密、册不滿於一千、殆非人巧所成、似借神巧而就、大抵或盛或衰、物之理、有成有壞、事之常、月散日亡、函脫卷、卷脫幅、塵侵蠹蝕、行缺字字、缺文將無孑遺、良可深痛、弟子竊聞、修舊實倍、圖新自寓、禪源始發、誠於修緝、洎移松社、終竭力於繕完、函卷之脫、則印之使全、字行之缺、則書而令具、得禮棄之金、而自書其目、受御帑之帛、而使負其衣、盛以琅函、安於寶藏、雖似緘麻、而完御座、庶同鍊石、以補天、光彩更生、莊嚴悉備、比及厥功之告畢、擬憑簡事、以落成、集千指之禪流、開九旬之海會、發藏演經、則手持眼應、尋詮得旨、則口與心同、或專定慧、而照見自身、或勸禮念、而懺除宿障、法輪大轉、智鏡普周、伏願云云、德日連佛日、以齊輝、仁風共禪風、而並扇、金輪益固、瞻景祚於萬年、玉葉寢昌、播餘芳於百世。(東文選卷一百十二)

文中に故難於雕印、莫廣流通、間或得而經營、例皆失於精妙と云ひて、雕印の至難なるを説き、次に之を承けて念慈大寶、來自異邦、秩簡部輕、紙薄字密、殆非人巧所成等と賞嘆せるを見れば、巧妙に雕印せられ居ることは自ら明かなるべく、特に函卷之脫、則印之使全と云へるを見れば、



ば一卷以上の缺存は特に他の板本に依て印成せるを知るべく、正に原本の版本なるを推知せしむるに足る。既に前來の史實に依りて雕造の事實を確かめ、然る後此の文に對すれば、文の妙と相待ちて雕印の工妙精絶なりしことを想像せしむべきものなり。

予輩は上述の史料に依り、契丹大藏は開元釋教錄の定めたる大藏の定數たる五千四十八卷、四百八十帙を基礎とし、之に補足して五百七十九帙を得るに至れるものにて、その完成時代は道宗即位の初年より清寧年間に亘るものといふべく、清寧八年即ち我朝の康平五年、西紀一千零六十二年を以て其の完成を紀念すべき年代なりと假定して可なりと思考す。

## 五 契丹本大藏經の内容

契丹大藏經の形式等に關し、いかやうなるものなりしかといふ事は、既に其斷片すら存在せざるゆへ、之を知ること能はざれど、その内容のいかなるものなりしかと云ふ事は幸に推察し得るの史料を有す。其は高麗の高宗朝に再雕せる現存の高麗大藏經には處々に丹本の異同を示し、『賢愚經』の如きは、特にその品々に細注を施して、丹本の形式を留めたるのみならず、當時校訂の任に當りたる守其法師は、別に『校正別錄』三十卷を編して、國本、宋本、丹本の三本に就て其得失正誤を論定せり。予輩は嘗て其三本校合に就て正誤の統計を試みたるに、凡そ七十四回の校合箇處を指示せる中、正誤又は脱文を補ひたる箇處は六十七回あり。其中、丹本に依りて其誤脱を正したるもの實に五十九回あり。されば此の高麗本の正しき箇

所は、すべて丹本の面影を留めたるものと稱すべく、『釋摩訶衍論』等、宋元の大藏刻本に存せざる經論の傳はりしもまた丹本の特色と稱すべし。

更に他の方面より丹本大藏の様式を伺ひ見るべきは、前に掲げたる『金石粹篇』に收められたる大遼涿州雲居寺石經塔記、即ち現今北京の附近に於て房山石經として有名なるもの是なり。此の涿州涿鹿山の石經は、もと陳隋の世に當り、南嶽大師の資なる淨琬法師が大藏經を末代に傳へんとて獨力にて經營を始め、淨琬、導公、儀公、暹公、法公等師資五代相繼ぎ、漸く大乘四大部經の半を鐫刻し終りしが、其後其事業を繼ぐものなく、空しく泥土に委棄せられ居りぬ。然るに契丹の威力が此の地を奄有するに及び、聖宗、興宗、道宗の三代に亘り、特志の僧ありて其事業を繼ぎ、『大般若經』の殘部と、『大寶積經』の全部とを鐫刻し、是にて『華嚴經』、『大涅槃經』、『大般若經』、『大寶積經』の四大部を完成することとなり。更に道宗の發願と通理大師の熱心に依り、其他の經典約八十四部を鐫刻せり。此の中に於て道宗の鐫刻せるものは廿二部に於て通理大師のは六十二部四十四帙あり。是等の緣起を記し、かねて其經名を掲げたるは、此の石經塔記なり。中に於て通理大師の鐫刻せる分は、悉く經名を掲ぐるのみならず、幾許の經卷を以て一帙とし、この帙は千字文番號にて幾號に當るかを詳記せり。此の番號は正しく契丹大藏經の順序を指示するものにして、たとひ此石刻の經典は直接に契丹彫造の大藏經に依らずとするも、當時の契丹人が一般に使用せし大藏の函號なること明かなり。現んや通理大師の石經鐫刻は、大安九年(西紀一〇九四年)より翌年に及び、二ヶ年の事業なれば、契

丹大藏雕造を終りて三十年後の事にして此の刻本大藏に依て其帙號を附せしことは自然の徑路として想像に餘りあるをや。さて此の帙に附したる千字文の函號に依りて其内容の順序を案ずるに現存大藏經本の高麗本、宋本、元本、明本の四種藏經の何れとも合せず、之を千字文號數を定めたる最初の定本たる『開元釋教錄略出』に照合するも亦合せず、但だ獨り寸分も違はず其號數を同じうするものあり。そは即ち五代石晋の天福五年西紀九四二年に十年の苦辛を積んで大藏音義を編纂したる可洪法師の『新集藏經音義隨函錄』の號數是れなり。但し可洪法師の『隨函錄』は、その經論の内容に於ては『開元釋教錄』と更に異なる所なければ、其の卷數に不同あるゆゑ『開元錄』に比して一帙を増し、彼れが四百七十九帙にて終れるを、是は四百八十帙に及び、隨つて千字文函號も、彼は群字號にて終れども、是は英字號迄亘れり。此の號數の全然一致せることは、契丹に於ける大藏經編次の順序がすべて此の可洪法師の順序に依據せることを推察せしむるのみならず、石晋を助けて中國に覇たらしめたるは契丹太宗の力なる故、晋帝即位の時、北方十六州の地を割いて契丹に與へたる政事上の勢力關係が、書籍上にも波及し、石晋時代にありし中國一切の佛典はすべて契丹に領有せられし事情をも推知し得べし。此の可洪の『隨函錄』が支那に失はれて、宋元明清何れの大藏中にも存することなく、獨り現存の高麗大藏に依りて存在するを得たるは、亦契丹大藏の恩惠と稱すべし。

此の石經塔記に記されたる通理大師鐫刻の經典中、終りの三帙、即ち

摩訶衍論十卷 寧一 大乘本生心地觀經八卷 壁一 大乘理趣六波羅蜜經

十卷 杜一

の如きは、何れも『開元錄』や『隨函錄』に收められざる經論にして、その號數たる寧、壁、杜の三字を検するに、杜字は千字文の四百八十一番に當り、壁字は四百七十八番に、寧字は五百七十八番に相當す。是に依りて、陽臺山清水院の藏經記に凡五百七十九帙とあるに照合すれば、契丹大藏は寧字の次なる晋字號迄に互れるものにて、現存の高麗版大藏より少きこと七十帙、其卷數約六千卷に當れることを推知すべし。

今左に大遼涿州雲居寺石經塔記に記されたる、通理大師鐫刻の四十四帙の號數のうち、前十六帙と、後三帙とにつき、『開元錄』『隨函錄』『續貞元錄』『麗本』『宋本』の五種の號數を對校せる表を掲げて、『丹本』と『隨函錄』と一致せる一斑を指示し、以て前言を證せん。此中に單に圈印を附せるものは、其中に缺けたるを示し、丹石經とあるは予輩が契丹本と同一なりと認むる、此石經塔記に留められたる字號なり。中間を略したるは、くどくしく全斑を掲げずとも、是れ丈けにて其大體を了解し得べければなり。

映中の經名及び卷數	開元錄	可洪 <small>音義</small>	續貞元	丹石經	麗本	宋本
首楞嚴經	十卷一帙	染	詩	○	詩	絲
菩薩地持經	十卷一帙	維	賢	○	賢	行
菩薩善戒經	九卷一帙	賢	冠	○	冠	維
淨業障經	一卷一帙	賢	冠	○	冠	維
						賢



(以上卷數部數稍不定なれど煩雜を避くる爲め之を註せず)

## 六 契丹に於ける佛典研究

契丹に於ける佛教尊崇の狀況は『契丹國史』及び金石文等に於て十分に其實證を求むることを得べく、『契丹國史』に、聖宗は道釋二教を好んで何れも其旨に洞曉せりと云ひ、興宗に到りては、尤重浮圖法、僧有正拜三公三師、兼政事令者凡二十人、貴威望而化之、多捨男女爲僧尼と叙し、『金石粹篇』の著者王昶は、天安十年に記されたる憫中寺舍利函記の豐饒なる金銀物資の布施物を讀み、想見其當時物力饒裕故所施之美麗如此と斷定を下せり。洵に太宗が石晋を助けてより地を割くこと十六州、年々輸帛三十萬匹の財貨を享有し、富國強兵、遙かに四維を壓したる當時の勢力を以てすれば、堂塔伽藍の創立や、舍利函の莊嚴に金銀を費す無數なるは怪むに足らず。而も皇帝自から經論の研鑽に耽る次第なれば、大藏經の蒐集、註疏、秘籍の探索、音義の製作、釋教錄の制定など、早く聖宗の時より始まり、道宗に至りて遂に大藏彫刻の大事業を成遂し、高麗藏を透して今日に至るまで學界に恩惠を寄與せるものと云ふべし。

仰も契丹僧俗が上下心を一にして大藏研究に耽りたることは、考證家が無二の宇書として珍重する『龍龕手鑑』三卷之を證して餘りあり。此書は其の題號に示す如く、元と大藏經音義研究の爲め作れるものにして、其の成るは聖宗の統和十五年、西紀九九七年に在り、著者僧行均と同學なる沙門智光は、之に序して、名言正しからざれば則ち性相の義差ふ、性相の義差

へば則ち修斷の路阻むと云へり。性相は佛教の理論的方面にして修斷はその實踐的方面なり、即ち佛教の研究先づ音義を審にせざるべからずとてこの手鑑を作れる理由を説けるなり、前に引ける石晋の可洪法師隨函錄著者はその慶冊疏文の中に、竊見當山龍龕、就海藏初圓と云へり、當代の人は大藏を呼ぶに海藏又は龍藏と云ひその寶庫をば龍龕と云へり、而してこの龍龕はやがて轉じて龍藏その物の稱呼ともなれるなり。

尙ほ道宗の初年に大藏經雕刻と共に佛書解題とも稱すべき完全なる釋教錄を制定せしことは、前來數次説出したる高麗朝に在りて王子の身を以て佛門に入り續藏經とも稱すべき佛典の註釋書數千卷を蒐集雕刻せし義天、法師契丹道宗と親交ありしことは其文集に明かなり、の文に依りて其事實を徵すべし。其文に曰く、

#### 飛山別傳議跋

甚矣古禪之與今禪名實相違也、古之所謂禪者、藉教習禪者也、今之所謂禪者、離教說禪者也、(乃至)近者大遼皇帝、詔有司、令義學沙門詮曉等、再定經錄、世所謂六祖壇經、寶林傳等、皆被焚、除其僞妄、條例則重修貞元續錄三卷中、載之詳矣、有以見我佛付囑之心、帝王弘護之志、而比世所行禪宗章句、多涉異端、此所以海東之師、疑華夏無人、及見飛山高議、乃知有護法菩薩焉、昨奉王旨、刊諸翠班、而恐流通未廣、勒之方板、億百世之下、住持末法者、豈不賴珠公力乎。(宋嘉熙元年沙門宗鑑撰する釋門正統八卷引用)

此文より見れば契丹に於ける大藏經校訂は、甚だ精密なる研究を経たるものにて、僞作假

托の明瞭なる『六祖壇經』『寶林傳』等は之を削り去つて大藏中に留めざる如く、他の方面に於ても、精密なる校訂を費せしこと明白なり、かくて契丹の榮華の迹は、但だ西方の民族にキタイの國號を留めたるに過ぎざれど、其の遺業たる契丹本大藏經の價値は、長へに高麗藏を透して其光輝を放ちつゝあり。(完)

## 南滿洲に於ける考古學的研究(第一回)

濱 田 耕 作

### 序 言

南滿洲に於ける考古學研究は烏居龍藏君の「南滿洲調査報告」ありて、其の一般を網羅せりと雖も、なほ諸種の研究の後の學者に殘されたるもの少なからず、更に精到なる考察を要するもの亦た之れなしとせず、余輩も去る明治四十三年十月北京より歸朝の途次、旅順の介墓石塚、廬家屯の貝墓、遼陽の石棺撫順の陶窯等を踏査せしも、是れ單に世に知られたる遺跡を訪問したるに過ぎず、たゞ僅に旅順刁家屯の古墳の一部を發掘して之を學界に紹介するを